一的にとらえられるかいなか、という點にあると考えている。

最後に今一つ述べておきたい。本書第三章第三節に收められた山崎利男氏の論稿「インドにおける中世世界の成立」によって我々は、現在、インドの史學界において四世紀から十二世紀にかけての北インド社會を題材とし、ヨーロッパ中世社會に範を求めたインド封建社會論が盛んに展開されていることを知ることができる。また佐藤次高氏の筆に成る同章第四節「西アジアにおける中世世界の成立」は、マムルーク（白人奴隷）軍人の農村における人と土地に對する支配と都市に對する經濟的支配を骨組みとするイクター制をめぐってイスラム封建社會論が展開されていることを教えてくれる。評者はインド史・西アジア史について全く知見を持たないが、こうした封建社會論の盛行という現象の背景には、これらの地域が現在直面している近代化という問題があるように思われる。即ち近代化の前提となり、またその克服の對象となる政治・社會制度の淵源を見きわめようとする強い意向が、こうした議論を推進する原動力となっているのではないだろうか。そしてそこには封建社會から近代へ、という單線的な史觀が前提されている。これに對し、ヨーロッパ的な基準で對象世界を一元的に把握する發展段階論に對する批判をもとに登場した社會史、また士大夫という中國固有の存在を通して中世共同體をとらえようとする谷川氏の見解は、對象世界の個有のあり方をもとに歴史の展開を把握しようとする。それらは我々をひとまず多元的な世界史理解へと導く。したがって、世界諸地域の近代化への志向を、どうくみとっていくかという問題がこの社會史的方法そして谷川氏の共同體論には課せられているのではないだろうか。

評者の力量不足から非常に抽象的な議論に終始し、また書評の領域を數々ふみはずしたことを深くおわびしたい。本講座の出版を契機としてより豊かな議論がまきおこることを期待してやまない。

一九八二年四月　東京

學生社　A5版　三一二頁

羽田　明著
中央アジア史研究

佐口　透

最近の中國シルクロード・ブームの影響もあってか、「新疆維吾爾自治區」という語が報道出版物にもしばしば用いられてきており、また、吐魯番とか烏魯木齊、和田などという地名やその場所も日本人にとって身近になっているが、しかし、この新疆という地域や維吾爾という民族の歴史が十分に理解されての上とは到底思われない。新疆といえば、その古代、前近代史は西域という稱呼でよく知られており、漢代・唐代の西域史や、中國との諸關係、あるいは西域の文物、東西文化交流の舞臺としての西域文明については多くの研究がなされてきた。しかし、一〇世紀以降の西域・中央アジア史研究は最近はふえてきたとはいえ、一般的にはよく知られていないことも事實であり、とくに一九四〇年代以前は、中央アジア近世史研究は國内的にも國際的にも乏しく、東洋史專門家の間にもその認識は薄弱なものであった。

このような状況のなかにあって、近世の東トルキスタン（西域）史の研究に着目され、これを開拓され、いわゆる「井戸を掘る」仕事に従事され、かつ、達成されたのが本書の著者、羽田明氏である。羽田氏が一九四二（昭和一七）年に發表された「明末清初の東トルキスタン――その回教史的考察――」（『東洋史研究』七―五）はこの分野での劃期的な、先驅者的論文であり、現在も價値を失わない業績であるが、以後、著者は近世東トルキスタン史、ジュンガル史、中央アジアのトルコ・イスラム史、東西交渉史の分野にわたって數々の論著を發表されて、斯界のメントールとして活躍されている。しかし、氏の二、三の單行書は別として、數多くの論文が四十年餘にわたって諸種の學術誌に掲載されているため、後進の研究者はその入手に不便を感じており、われわれはこれが一著にまとめられることを願望していたが、幸い、本書は中央アジア史に關する氏の論文集成であるとともに、體系化の試みもなされていて、ながらく學界で待望されていた書であることは喜ばしいかぎりである。

まず、本書の內容目次を紹介しておきたい（ただし、節・項は省略する）。

第一部　東トルキスタン近世史の研究

第一章　一七―一八世紀の東トルキスタン

第二章　清朝の東トルキスタン統治政策

第三章　「回酋」アブド・アッラシードと西寧――清朝初期のイスラム都市――

第二部　ジュンガル王國史の研究

第一章　エルート族考

第二章　西套エルートの起源――『朔漠方略』の誤傳について――

第三章　エルート＝ホショト說について――ジュンガル王國勃興史の一側面――

第四章　ガルダン傳考釋

第五章　ジュンガル王國とブハーラ人――內陸アジアの遊牧民とオアシス農耕民――

第六章　ジュンガル王國の文化

第三部　東西交渉史論

第一章　東西文化の交流

第二章　ソグド人の東方活動

第三章　明帝國とオスマン帝國

第四章　大黃のセレンガ地方原產說について

第五章　西寧と多巴――中國西北邊境の貿易都市――

第四部　トルコ民族とイスラム

第一章　カシュガリーと『トルコ・アラブ語彙』

第二章　遊牧民と都市――とくにトルコ民族の定住民化・都市民化をめぐって――

第三章　トルコ民族のイスラム化

第四章　ジャダの呪術について――シャマニズムとイスラム――

第五章　スーフィズムとトルコ民族

第六章　サトゥク・ブグラ・ハンの改宗傳說について

第七章　マムルークとカプゥ・クルラル――イスラム史上の「奴隷兵」制度――

第八章　イスラム國家の完成

チャガタイ・ハン家系圖

カシュガル・ホージャ家系圖
中央アジア要圖

本文五〇六頁より成る本書の内容は對象分野によって右のような四部構成となっており、第一、二部は主として一七世紀から一八世紀にかけての東トルキスタンと同時代のジェンガル王國の歴史を扱ったもので、とくに第一部は著者の初期の研究分野であり、原作は一九四二―四四年の著述である。第三部にも右の分野に關する論文（第四、五章）が收められている。著者は「舊稿を書き改め、首尾一貫した一冊の書物に纏め上げること」を目標とされ、四部に編集されたので、氏の研究が新らたに體系化されたと見ることもできる。しかも、舊稿（すなわち原作）には字句の統一のほか、多少の修正の手が加えられ、著者が現在では不十分と見られた箇所には新しい追記や注記が附せられていて、最近の關連研究の一端を紹介されている。本書は羽田氏の舊稿の集成ではあるが、評者（佐口）としてはそれが體系化された新らたな著書であると見なして、以下、多少の評を試みたい。實は評者は過去三十年餘にわたって、羽田氏の研究に啓發され、氏と共通の研究分野のなかに踏みいり、氏とは若干の視點の相違を意識しながら、氏の研究業績を追跡し、あるいは依據し、あるいは缺落を埋めながら、自らの研究を進めたという同學の立場からの紹介とならざるを得ないことを豫めおことわりしておきたい。

羽田氏の研究全體のなかの最も代表的な第一部第一章は氏の最初の論文「明末清初」の擴充增補版であり、一七―一八世紀東トルキスタン史の大勢を述べた研究である。氏は一〇世紀前後に溯る東トルキスタンのイスラム化の過程を零細な中國史料を檢討して跡づけ、それがかなりの時間を要したことを指摘しつつ、ホージャ家の權威の樹立に伴って一七世紀はじめ、いわゆる明末清初の交にイスラム化の完成を見たものと判斷している。氏はこの研究に際して、當時、西歐人の先進的研究として知られていた Dutreuil de Rhins, F. Grenard, M. Hartmann らの所說にもかなり依據されてはいるが、明代中國史料からの零細な記事を利用して綿密に論じており、現在も基本的には氏の所說を大きく變更するほどの研究は現われていない。ただ、氏がターリム盆地におけるイスラム化の成熟（ホージャ時代）をイスラム「神聖國家」（M. Hartmann の用語）の出現と見なしておられるが、「神聖國家」じたいの定義や說明がなされていないのはやや物足りない。モグール國家制度、スーフィズムとくにナクシュバンディエ教團についての研究も最近はかなり進んでいるので、その檢討による新らたな體系化は今後の課題となると思われる。羽田氏はさらに、白帽回、紅帽回、纏頭回などと中國史料で稱せられている土着イスラム教徒の民族問題についても周到に考察している。祁韻士の『藩部要略』卷一五に見える輝和爾は Uyghur の音譯であろうが、羽田氏は現代維吾爾との異同について明言を避けている。私の考えでは現代の維吾爾は二十世紀において新しく採用された民族稱呼であって、明代西域史料の畏吾兒（及び輝和爾）は佛教ウイグルの少數殘存集團と見てよく、現代維吾爾とは別と見なすべきであろう。ついで、羽田氏はカシュガル＝ホージャ家の由來、ジュンガルのカシュガリア征服、清朝の東トルキスタン支配について概觀し、一八、九世紀における清朝の新疆統治、イスラム教徒の反亂について述べている。この第一部第一章は一五―

一八世紀間の東トルキスタンのトルコ＝イスラム社會の形成についての通史であり、また、在來、前人未踏の諸問題を指摘したものであり、開拓者的業績として高い價値を持っている。

つぎに第二章は氏が一九四四年に發表された「異民族統治上から見たる清朝の回部統治政策」の修正改訂版であり、やはり氏の代表作の一つである。本章で、羽田氏は清朝と回部（東トルキスタン）との關係がどのように始まったかの過程を説明し、回部を平定した清朝がどのような目的、方法で回部を統治したかを多角的に分析している。統治は軍政と民政に二大別され、總統伊犂等處將軍の管轄の下に參贊大臣、領隊大臣の稱號を持つ軍事指揮官が官兵を率いて、カシュガリアの各城に分戍した。軍隊としては滿蒙兵、漢人綠旗兵、シボ、ソロン、ダフール、チャハル、エルートなど遊牧系民族で編成された約五、六千人の駐屯兵があった。新疆駐兵の附帶事業として屯田（兵屯・戸屯・犯屯）があった。民政・地方行政組織として羽田氏は州縣制、ジャサク制、ベク制があったことを指摘している。ベク制は土着イスラム教徒統治のため、とくに必要な土着人出身の官人であるが、羽田氏ではベク官人制の構造的、體系的分析は缺けている。羽田氏は「清朝はカシュガリアを中國の領土の一部としてではなく、滿洲人君主に隷屬する軍事留保地的な自治領として直接これを統治しようとした」と指摘しており、この「軍事留保地的自治領」というのが氏の新疆史の理解の基本であって、私も占領地に對する監督統治という意味をふくめて氏の説に追隨する。羽田氏は清朝の東トルキスタン統治政策を牽制、隔離、懐柔の三つの觀點で分析している。牽制とは黨爭の利用、異種部族の隔離、ハミ、トルファンなど忠誠な回子の優遇、威服主義の採用、カシュガリアの支配階級の牽制などをあげ、とくにベク官人に對する嚴しい監視をさすものである。隔離政策とは漢・回の隔離に關する各種の方策であり、懐柔政策とは民衆の人心收攬に關する各種の方策である。氏の究明された統治政策の内容は詳細にわたっており、私もこの研究を參照して教示を得ることが多い。しかし、牽制、隔離、懐柔という概念、それらの内容の分類が若干重複している場合もあり、今となっては、もっと別の方法論か規準で再整理して體系化してみたいと感ずる點がある。とくに、社會經濟生活の解明には上記の三種の概念では律し難いものがあろう。しかし、原著はがんらい、統治政策という課題の直接的處理を目的とされた點から見て、私の批評も當らないかもしれない。いずれにせよ、この論文は總合的かつ實證的な分析に基づいていて、今のところ、他に類のない資料として高く評價される。以上についで、ホージャ勢力の復活、白山黨・黑山黨問題、コーカンド・ハン國の干渉、帝政ロシアの新疆への接近、清朝の新疆支配の弱體化と動搖、イスラム教徒の反亂、ヤクーブ＝ベクの侵入などについて述べられ、左宗棠による新疆收復の過程が要領よく考察されている。新疆省制の施行によって滿洲的統治政策は根底から覆り、新疆は漢人の植民地となり、滿洲王朝の領土から一轉して中國の領土になったと、羽田氏は結論している。

東トルキスタン近世史に關する羽田氏の研究は四十年前の一九四二―四四年に發表されたものであることを思うと、それがいかに開拓者的業績としてすぐれたものであるかを痛感せざるを得ないのである。しかも、それらは現在も不動の學術的價値を保っている。實は羽田氏には、『支那周邊史』(下)（一九四三年刊）に收められている「トルキスタン史・近世」という概説があり、現在の著者には收

錄されていないが、明代の西域に關する記事も詳しく、やはり、後學に影響を及ぼした論說である。羽田氏の研究は根本史料を引用しながらも、かなり概說的に敍述され、中央アジア史の大局を把握され、一九四〇年代において、わが國の學界、海外の學界ともに、前人未踏の分野を總合的に切り開かれたのである。この分野で研究する數多くの後學が現在では、氏の研究成果に多くのものを當然附加するにいたっているけれども、それは氏の研究に基づく成果であり、それは氏の開拓者的業績の擴充、增殖による中央アジア史學の發展を意味するのである。なお、第三部に收められている「大黃のセレンガ地方原產說について」「西寧と多巴」は東トルキスタン近世史の分野での論文として第一部に關連づけたい。前者はシベリアのロシア人に強く要望された大黃の原產地がセレンガ地方と傳えられたのは誤解であって、セリング（シニング、西寧）と混同されたものであることを考證し、後者は青海における商業都市の盛衰の背景について考證した論考である。兩者とも短篇ながら、ペリオ學風を思わせるものがある。

羽田氏の第二の研究分野は本書第二部の內容をなすジュンガル史である。第二部は五つの論文よりなり、發表年次から見ると、一九五〇—六〇年代に執筆されたものである。わが國の蒙古・西域史研究がさかんであった一九四〇年代以前においても、ジュンガル史の研究はきわめて貧困で、わずかに矢野仁一が概說的に扱った程度であって、內陸アジア近世近代史研究に對する認識不足の狀態がつづいた。その意味でジュンガル史を基本から研究しようとした羽田明氏の功績は大きい。ジュンガル史研究には『朔漠方略』『準噶爾方略』『清實錄』などの基礎的史料の他に、多種多樣の清朝文獻があり、その利用には多大の精力が必要である。ロシア側に資料があったにせよ、日本の研究者としては J. F. Baddeley の著述に依據することで精一杯であった。羽田氏は東トルキスタン近世史研究と平行して、關連性の密接なジュンガル史の諸問題にとり組んでいた。第二部第一章「エルート族考」は清朝史料に見える厄魯特（エルート）の語義とその本態を考證したものである。氏はエルート＝ホショト說とエルート＝ジュンガル（チョロス）說を一應承認し、前者の立場にやや贊成したいと述べている。實に、厄魯特の實態は解明し難いのである。その後、ジュンガル史の研究者がふえ（ソ連邦のズラトキン氏、チベット史料の山口瑞鳳氏、モンゴル＝オイラート史料の岡田英弘氏をはじめ、若松寬、森川哲雄、宮脇淳子氏らの研究）、すぐれた研究も發表されたのを機に羽田氏はそれらを參照しながら、「エルート＝ホショト說について」を執筆された（本書、第二部第三章）。その主旨は、エルート＝ホショト說を強く主張できる根據、理由を說いたものである。第四章「ガルダン傳考釋」も重要ではあるが、ここでは言及を省略する。第五、六章はジュンガル王國と中央アジア定住民との關係、ジュンガルの外來文化受容についての論考である。ジュンガル王國領內にブハーラ人（東トルキスタンのトルコ族）が移住してジュンガル支配者のために農耕に從事し、この農耕移民がタランチと呼ばれていたこと、中央アジアの住民がサルト（商人）としてジュンガルのために商業を營み、中國やロシアとの間の中繼貿易に從事する者があったこと、ジュンガル軍隊のなかのブーチンと稱する砲術兵士も中央アジア住民の出身であったことを清朝史料や歐露文獻によって考察された。第六章ではジュンガル王國內へのラマ敎の傳來について述べ、飮茶の風習、寺院

都市の出現、寺領組織、文字、書籍、ラマ僧の教學的役割などについて解明されている。羽田氏のジュンガル研究はわが國ではじめてジュンガル史を本格的にとりあげたもので、その意義は大きい。ただし、氏の研究範圍は基礎的問題（エルート考證、ブハーラ人問題）などに限られ、ジュンガル王國史全體を構造的、かつ、體系的に研究された論考はまだ發表されていない。

第三部　東西交渉史論では古代における東西文化の交流とソグド人の東方活動が主要な內容である。兩論ともイスラム以前の中央・西アジアを舞臺とする東西交渉史、文化交流史を羽田氏の史觀で體系づけたもので、とくにソグド史の敍述は魅力的である。

第四部「トルコ民族とイスラム」は羽田氏の別の重要な研究分野であり、八章に編成された八篇の原著論文は最近十五年の間に發表されたことより見て、氏が最近、とくに關心を抱いておられたテーマと見受けられる。その中心課題は十世紀以降の中央アジアにおけるトルコ族の定住化とイスラム化及びそのスーフィズム化である。羽田氏はカラハン朝の中央アジア移動、サトゥク・ブグラ・ハン改宗傳說によって代表されるトルコ族のイスラム化、カラハン朝でうまれた現存最古のトルコ語文學作品『クダドグゥ・ビリッグ』、カシュガリーの『トルコ・アラブ語彙』の成立、これに伴なうトルコ族の定住民化、都市民化の過程とその特徵を總合的に解說し、さらにトルコ族のイスラム化にもシャマニズム的要素の殘存していることを指摘している。その點で「ジャダの呪術について——シャマーズムとイスラム——」は注目すべき論考である。北・中央アジアの遊牧民族間で時空を越えて廣く行なわれているといわれるジャダ呪術がイスラム教義と複合している事實を羽田氏は解明している。また、遊牧トルコ族がイスラム化した際に、隊商に參加していたスーフィー（もしくはデルヴィシュ）の教說を媒介としたことについても事例をあげて說明しておられる。第四部第八章——本書の最終——はイスラム國家の完成と題して、オスマン國家の形成と成立、體制についての概說であり、最近のトルコ共和國の研究をも參照している。第四部の各論說は在來、未解明の分野を扱ったもので、羽田氏はわが國の學界ではじめて概括的考察を試みられたものとして評價される。問題は廣汎なので、今後、これらの問題はさらに深化されねばならず、今後の研究者の任務となろう。第四部はこれに對する有益な指針となるものと思われる。

以上、見て來たように、羽田氏は東トルキスタン近世史、ジュンガル史、東西交渉史、中央アジアのトルコ民族史の四つの分野で輝かしい業績をあげている。いずれも重要であるが、私は東トルキスタン近世史開拓の功績をとくに評價したい。羽田氏の研究法と論說は實證的であることは當然であるが、その中味は難解な理論化に走ることなく、平明で理解しやすく、また、考證的論文にありがちな讀解上の難澁さがない。ボン・サーンスを感じさせる。わが國の西域史學の傳統的手法、トルコ文獻學、フランス東洋學の總合的學風が融合された中央アジア史學がここにある。本書全體が文化交流史そのものである。したがって、專門研究者のみならず、廣くアジア史に關心を持つ研究者にも理解しやすく、安心して依據することができよう。もちろん、最近の新しい研究成果が本書にすべて反映しているわけではない。學界が進步すれば、新研究が出てくるのは當然である。しかし、羽田氏の著書はそれじたいまとまっており、その範圍內で後學の士は安心して依據し、研究の出發點とすることが

できよう。私自身、研究分野の一つとしている東トルキスタン近世史の分野に限っても、氏の所論には史料操作上、あるいは歴史の大局把握上の重大な難點はほとんどないように思われる。強いて不足の點をあげれば、社會、經濟、生産、地域性、少數民族問題に關する敍述がやや乏しいことである。なお、ここで一、二氣づいた點をあげると、一九頁の deMahométisme は Le Mahométisme と、二五頁の丕思は歪思とそれぞれ讀むべきであろうし、三六頁のモスール・ダーバンはモスル・ダバーンと讀むべきか。

わが國の東洋史學界では中央アジア史に關する論文は多いが、專門研究書（單行書）は比較的乏しい。その意味で、羽田明著『中央アジア史研究』はきわめて重要かつ有意義な文獻であり、學界の貴重な財産である。私は本書を通讀して、羽田明氏の中央アジア史學研究上の貢獻が絶大なものであることを確信するとともに、氏の研究活動と本書の刊行に對し、心からの敬意を表する。

一九八二年六月　京都　臨川書店
A5版　五〇七頁

鈴木　中正編
千年王國的民衆運動の研究

大澤　顯浩

一體、「邪敎」とは定義されうる概念なのだろうか。しかし「邪敎」とは前近代中國の支配の論理と不可分に結びついたものであろう。如何なる社會でもその支配の正當化の論理は必要とされる。それは、P・L・バーガーのいうように、歴史的にみて宗敎的な世界の正當化が最も確實で永續性のあるものであるといえよう。[1] とすれば、聖と俗が截然と區分されない社會では異端運動はまさしく正統性に直結する重大な問題を惹起するであろう。獨自の正統性を主張する「邪敎」の活動が常に政治性をもって對處されることの意味もここにあると考えられる。宗敎的反亂こそこうした正―邪の對立を最も鮮明に浮彫りにする場であったろうし、宗敎運動を研究する意味の一つはここに存在するともいえよう。こうした民衆宗敎運動の研究が精力的に進められている分野の一つに明清時代があるが、近年のその研究には大別して二つの方向があるように思われる。一つは太平天國・義和團運動への關連を考えようとするもので、宗敎的反亂の果した民衆の變革主體形成の過程を問いかけるものである。もう一つは千年王國信仰（millenarianism）という概念を援用する立場に代表され、まず個々の具體的事例を對照させるべき理念型の設定をはかろうというものといえよう。しかし、兩者の立場は決して相反するものではなく相補完するものとならなければならない。

千年王國信仰に基づく民衆運動と中國における白蓮敎などの宗敎運動との類似性は早くから指摘されていたが、實際に研究面での比較對照が試みられるようになったのはホブズボームの著作が紹介されてからのことといってよい。[2] その後、ウィルソンやコーンの研究の翻譯が出され、[3] 中國史に關しても太平道や太平天國、清代の宗敎運動等を千年王國信仰との關連でとらえる研究が現われて千年王國論は民衆運動の研究に一つの場を與えられるようになったのである。こうした傾向に刺激を與えたホブズボームの見解の中心は、千年王國主義の運動を前近代的な抵抗運動が近代的な革命運動へとつ